

図1 約6,000年前からの内陸交通の道すじ (企画素案：乾 哲也 作図：奈良智法)

富良野盆地周辺に産出する「十勝溶結凝灰岩」起源の「高温型石英結晶」(キラキラ反射する水晶と同じ成分の砂粒)をたくさん含む縄文土器が、厚真町の山奥から発見されます。おそらく、図のような富良野からの道のりが想定されます。

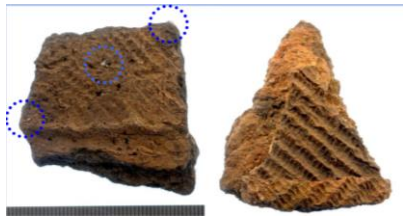
幌内地区の遺跡からは石狩川中流域で多産する丸のみ形石斧や棍棒形石器も数多く出土しており、このルートで入ってきているものと思われます。

“キラキラ土器”（富良野盆地系土器）

平成 14 年度より始まった厚幌ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査で、苫小牧・千歳周辺では見られない、表面がキラキラ輝く縄文土器が多数出土しました。この光るモノの正体は長軸1 mm以上の石英結晶が反射することによるものでした。

大粒の石英結晶は、石狩・胆振東部・日高では土壌中に含まれることが無く、土器の粘土自体が、富良野盆地の土であることが化学分析でわかりました。

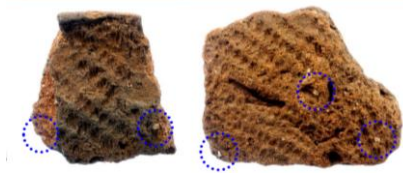
千歳・恵庭・札幌・江別市などの石狩川・千歳川流域でもほとんど発見されていないことから、この土器は北海道島の中央部に源流をもち、太平洋へ注ぎ込む「鷗川」を伝って厚真へ運ばれてきたものと思われます。



キラキラ土器を
砕きすりつぶす。
もったいないけど・・・新しい発見に期待！



40倍の実体顕微鏡で
観察！ どんな岩石・
鉱物が入っているかの
なあ？



すりつぶした土器の
砂を0.425・1・2・5
mmの4段のフルイ
にかけて砂粒の大き
さを見る。



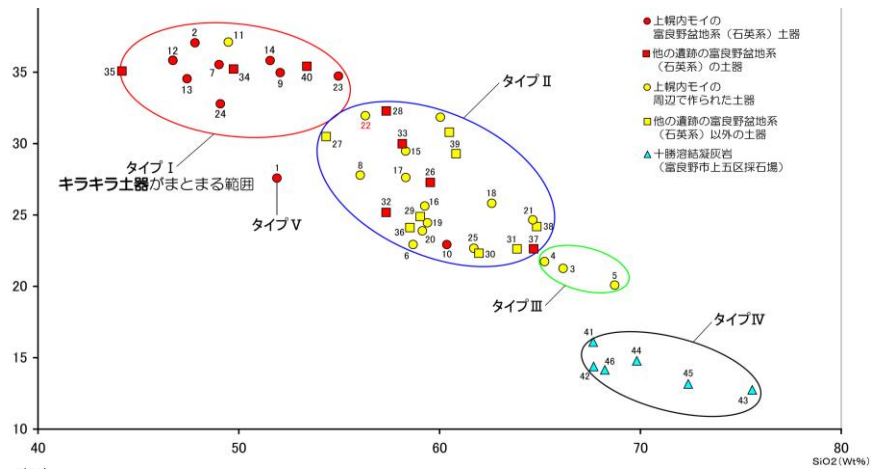
直径1 mm以上の半透明の石英が
いっぱい！ 写真中央上側の金色
は雲母です。

キラキラ土器と地元の土器

分析：斜里町教育委員会 合地信生氏

顕微鏡観察の結果

縄文土器の粘土の 化学分析の結果



キラキラ土器の素！

とからようけつぎょうかいがん
十勝溶結凝灰岩



富良野市上五区の十勝溶結凝灰岩の大きな崖。30m以上の高さです！

富良野盆地の火山灰の大露頭



十勝溶結凝灰岩の砂。石英の粒が
わかるかな？



富良野の畑は白い！ 畑の土には
石英の粒がたくさん！

厚真川上流域周辺のアイヌ語地名



図2

今から100年前の大正年間につくられた厚真村道計画図（幌内～厚真ダム付近）

シオルマ（厚真町） 草ソテツの群生するところ（厚真村史）

滝の・道を・渡る（乾）

オソウシ（夕張市滝ノ上） 川尻に・滝がある・ところ（増補改訂夕張市史）

オニキシベ（厚真町） 入り口で・木に・削り・つけているもの・川（厚真村史）

ルーマキウシ（むかわ町豊田） 道・入る・キナウシ（蒲・群生する・ところ）

キナウシコタンからの厚真への道筋（穂別町史）

※ 鷗川対岸（左岸）：ルベシベ沢 道・～沿って下る・もの

メルクンナイ（厚真町） 水路の・ある沢（厚真村史）

パンケオビラルカ（むかわ町穂別） 川下の・川尻・崖・道・の上（穂別町史）

厚真町の山奥は、現在、林道厚真川炭鉱線（厚真）－林道パンケオビラルカ（穂別）を除き、ほぼ行き止まりの状態です。しかし、アイヌ語地名のル（道）というアイヌ語からは鷗川筋や夕張川筋への山越えのルートが想定できます。

近代史では、明治期において幌内から夕張へのクマ狩りや大正9年発行地形図中には幅1m未満の道の記載（メルクンナイルート）があります。また、シオルマ（現シヨロマ沢）は滝瀬の中を馬車で木炭などの運び出しも行われていました。

これらは、ダム建設に係る遺跡の発掘調査成果から、特に厚真川上流域と鷗川中流域を結ぶルートや千歳～早来～厚真～平取・二風谷・荷負～静内への石狩南部から日高への内陸ルートが浮かびあがり、先史時代から続く山越えのルートが重要な役割を担っていた可能性が指摘できます。

また、厚真町新町からむかわ町似湾へ抜ける「ウクル」も“道”に関係する地名の可能性がります。

鷓川を遡って ～北海道島中央部の源流部周辺の状況～

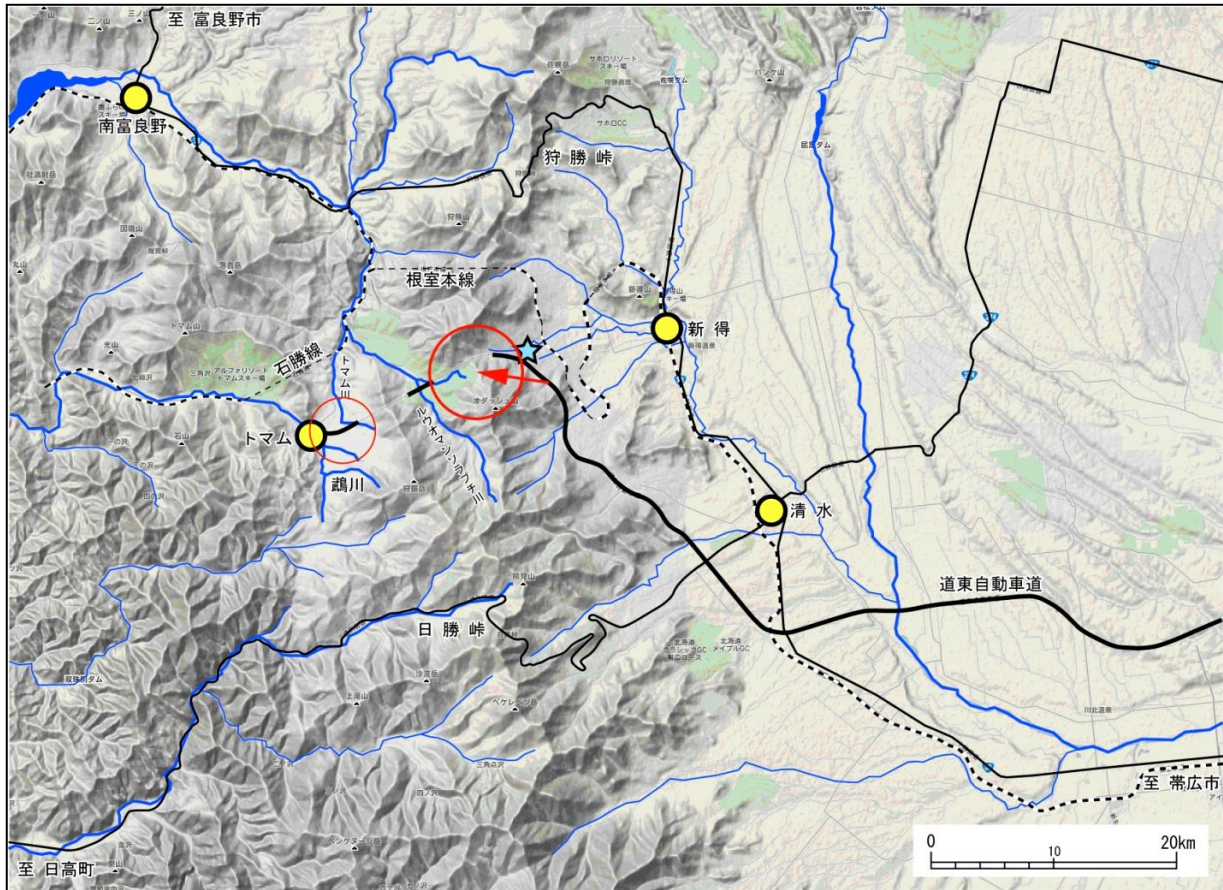


図3 日勝峠-狩勝峠付近の地形

○大：日高山脈-大雪山系の鞍部

○小：日本海側水系と太平洋側水系の最も近距離の分水嶺。かつ低平な部分。★：明治時代の駅通跡

自然地理学的背景

北海道島の背骨とも言われる日高山脈から北海道の屋根、大雪山系にかけて最も標高の低い場所が、南富良野町と新得町の町境いにあります。

南富良野町には鷓川の源流部があり、また石狩川水系空知川の源流となる支流群も同町にあります。このうち南に隣接する勇払郡占冠村上苦鷓(トマム)は鷓川源流部、南富良野町串内には空知川支流トマム川やルウオマンソラプチ川があります。太平洋側水系と日本海側水系の分水嶺は極めて平坦で、かつ約 1.2km の近距離にあります。

河川や山稜の鞍部を交通路としていた先史時代において、これほど通りやすい分水嶺は道内においても数少ない重要な地点でもあります。

人文地理学的背景

アイヌ語地名

トマム：「沼のあるヤチ川」湿地のこと。＝平らな場所で流れが極めて遅い川とも言えます。すなわち、内陸部の山に囲まれた地域でありながら盆地状の低平な地形。→歩きやすい！

ルウオマンソラプチ：「道が(奥の方に)・入っている・空知川」(南富良野町史)

空知川と新得町十勝方面への山越えのルートであったことがアイヌ語地名からも容易に想像できます。

明治時代の交通路

現在の私たちが住んでる北海道島は、かつて先住民族アイヌの人たちが「アイヌモシリ（人間の住む土地）」と呼び、やがて和人が交易などを目的に入ってくると和人によって「蝦夷地」と呼ばれるようになりました。現在の「北海道」となったのは明治2（1869）年、開拓使が探検家の松浦武四郎の提言の中から決めたものです。

明治時代には、農業開拓や石炭採掘などのために北海道内陸部まで和人が移住してくると、開拓使は人々の交通利便性を図るため「駅逓制度」を改正し、一定間隔の要衝に駅逓所を配置します。

周辺の駅逓所としては、落合、上トマムなどの現在の集落、道路沿いにありますが、ここ「十勝越え」のやや下った場所に「新得駅逓所」が設けられました。まさに、この場所は、現在の狩勝峠ができる前まで人々が越えた北海道の東と西の峠であり、アイヌ語地名からも先住民族のアイヌの人たちも行き来した場所と考えられます。

太平洋から厚真川上流域へ、山を越えて鷓川へ、そして富良野や十勝へ抜ける北海道の大動脈が厚真町の山奥に存在していたものと思われます。



写真1 図3の○大の場所。高速道路(←)や送電線がこの場所を越えています。



写真2 新得駅逓所跡の表示板



写真3 駅逓所跡から新得市街地を望む

新得駅逓所跡は山の中腹にあり、現在の新得町市街地から離れた場所にあります。今では周囲に人家も無く、解説板が無ければ、この場所が現在の狩勝峠同様の重要な交通要衝であったとは想像もつきません。

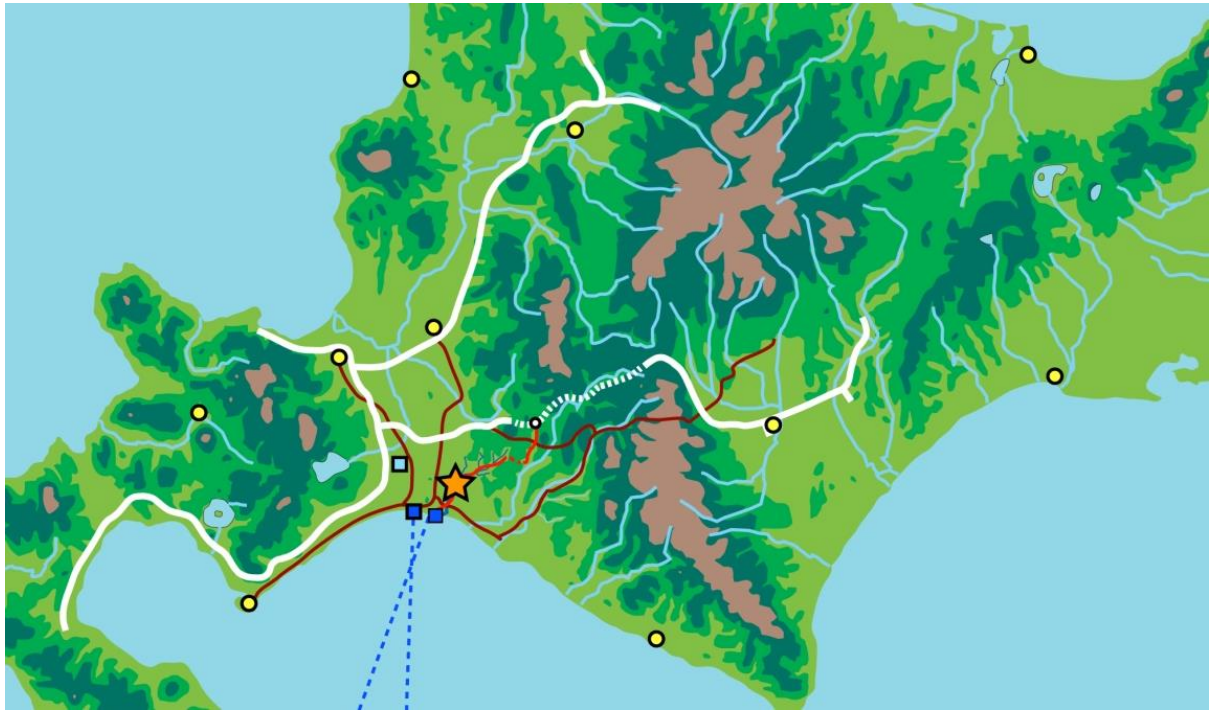


図4 北海道の中の厚真町とこれからの物流ルート

厚真町の課題として、町内の交通量のほとんどが、海岸部の日高道やJR日高線、フェリーターミナルを通り抜けており、厚真町市街地への流入量は数少ない。このため、商店街等への外部からの経済効果も少ない。さらには厚真町のイメージすら持っていない道民も未だに多い。

約6,000年前の縄文時代の早期後半から続くこの内陸ルートは、現在、道道北進平取線として開発局や厚幌ダム建設事務所がトンネル、橋脚工事などを進めており数年後には、復活する予定です。

この道路が開通した場合、苫小牧港、苫小牧東港と北海道の大動脈である高速道路北海道横断道穂別インターチェンジとの最短ルートが厚真町市街地を通り抜けることとなります。地域に魅力があっても、交通の便が悪ければ、人はなかなか来ません。

この道路や他の沿線整備も含め、復活すると先述のルートで厚真町市街地や幌内地区も交通量が増え、活性化への基礎となるものと思われます。厚真町の将来にとって、とても大切な建設中の道路です。



写真4 オビラルカトンネル（厚真側）



写真5 厚真町側メルクナイ林道表示板

※ 北進平取線は未開通で通り抜けはできません。

なぜ、厚真川流域なのか？



蝦夷国全図—三国通覧図説— 1785 林子平

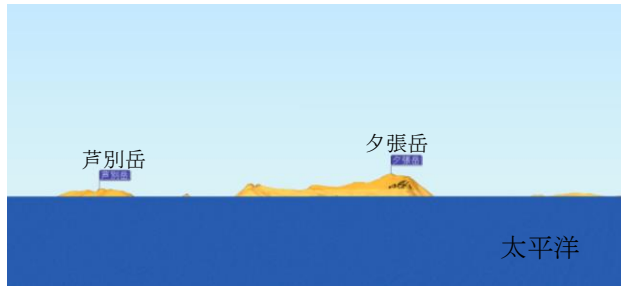
厚真川河口部からの夕張岳

市立函館博物館 児玉マリ氏寄託資料

江戸時代に和人が多くの蝦夷地地図を記していますが、そのほとんどは海岸部の記録に留まっています。

しかし、内陸部の夕張岳（標高 1668m）は記されているものが極めて多く、海岸部からも望むことができる秀峰であったためと思われます。また、金山としても注目を浴びていたこともその要因と思われます。地図の無かった時代において夕張岳は人々の交通の目印になったことは想像にかたくはありません。

海岸部を通行すると、勇払から厚真にかけて最も夕張岳を望むことができます。それは距離的なもの以外に、海岸部から内陸部へ広がる湿地帯と湖沼群によって視界が広がることも大きな要素と思われます。さらには、地形ソフト「カシミール3D」によると青森県下北半島尻屋崎からも見えることになっています。まさに本州の人々は、太平洋に島のように見える夕張岳を目標として、現在のフェリー航路となっている八戸～苫小牧航路のように太平洋を渡ってきた可能性もあり得るのではないのでしょうか。



野幌丘陵東麓からの夕張岳（望遠レンズ撮影）

カシミール3Dでの下北半島からの夕張岳

「蝦夷国全図」『三国通覧図説』 天明5（1785）年

林子平『三国通覧図説』「蝦夷国全図」における「アツマ」と「ユウハリ山」の位置は「イブツ」（現勇払）と東西反対の位置に記されています。これは「アツマ」と「ユウハリ山」がセット関係にあり、聞き取りによる地図作成の時に一連の聞き書きの中での間違いがあった可能性があります。これは厚真川が夕張越えのルートであったものとも推察できます。

直接ルートの話からはそれますが、シャクシャインの戦いに関わる記述での「オニヒノノ出処」は石狩アイヌ集団の総大将オニピシの出生地の可能性を示しており、ルートを抑え、富を蓄積していた地域だからこそ、幕藩体制の支配下におかれる近世前葉に至るまで力を持った地域だったかもしれません。このことは、「蝦夷記」（1692年）でも2度も記述されている「阿津摩」（厚真町）の重要性が読み取れる記述があり、矛盾していません。

『勇武津場所様子大概書』 文化5（1808）年

「あつま川は西蝦夷地ゆうはり山に続き、川丈拾六、七里の内夷人住居也。地名 ちりちり ちけるへかんべ とんにかへはるつゐ つけへつ しゐん」

『三航蝦夷日誌』 嘉永3（1850）年 松浦武四郎

幕末の蝦夷地探検家であり、現在の北海道の名付け親である松浦武四郎が記した著書の中にも「此川（厚真川）上遠しと聞。又土人（この土地に住み続けている人）の云ニ此川上はユウバリ辺より落来る」

小規模な河川でありながら、内陸部（上）へ入り、その先は夕張へ続くことがしるされています。アイヌの人たちからの聞き書きで記しているため、厚真川を遡り夕張へ抜けるルートとして利用していたのでしょう。

キラキラ土器（内陸ルート）の衰退

厚真川上流域では平成14年から15年間も発掘調査が続き、また平成19年からは厚幌導水路建設にかかわる発掘も厚真川中流域で行われています。

中流域、特に富里地区では江戸時代以降の住居跡やキセル、寛永通宝、すり鉢片などの出土遺物や和人による記録がありますが、上流域での発掘調査では、中世末期ないしは近世初頭以降、明治中期の開拓期までの間、まるで無人地帯のように、その痕跡を見出すことができません。

このことは、和人（松前藩）が積極的な北海道経営を始めた時期とも重なり、沿岸航路の発展と海岸部での交易活動の変化によって山越えの内陸ルートが衰退したものとされます。そして、狩猟の場としての厚真川上流域として、変化していったものと思われます。



大木の根元に祀られたシカの頭骨など
山の狩猟場での送り儀礼（1667年頃）

ルートはどの時代においても、社会構造の重要な根幹

時代によって交通手段が変わり、ルートも変わります。また、社会が需要するモノが変われば産地と消費地を結ぶラインも成長消滅を繰り返します。いくら技術が進歩した情報化社会の現代と言えども、やはり人と物の流れは根幹を成す重要要素です。現代の私たちもキラキラ土器を運んだ縄文人から何らかのヒントを学ぶことができるのではないのでしょうか。

特に、わが町厚真町は日本海航路の苫小牧東港があり、太平洋航路の苫小牧西港から車で40分、新千歳空港からも40分、建設中の内陸ルートと期待される北進平取線もあり、積極的にその“地の利”を活かす時にきているのかもしれませんが。

さらには利便性が十分に確保されつつある現代社会においては、単なる物流ルートとしてのみならず、流路延長52.3kmの厚真川河口部から下流域の平野部、そして夕張山地の山間部へと風景の移り変わりを楽しむ四季折々の観光ルートとしての可能性も秘めているかもしれません。

先人たちの歴史、知恵の積み重ねを、今を生きる私たちが再認識して私たちにの活用を考え、後輩たちにより良い魅力ある厚真町を繋ぎ伝えなければならないと思います。

（厚真町教育委員会 学芸員 乾 哲也）

道の歴史から未来への展望

厚真町の考古学的成果で約6,000年前の縄文時代以降の内陸ルートの変遷から明治・大正に至るまでの歴史を追うと、“道”は私たちが創造する以上に古くから地域の発展に極めて密接な関係があったことが見えてきました。

そして情報化社会と呼ばれることが定着し、益々加速度的に進行していくこの流れにおいても、実体としての人が動きや物が流れるための道は手段方法が変わっても、これからも必要不可欠な要素として存在し続ける要素です。

これからの道は、それぞれの地域の地質・地形・動植物相・そして歴史からの必然性や付加価値を見出していくべきなのかもしれません。

厚真町も新規開通の蘇ったキラキラ土器の道とともに流出や通過の道としてのみではなく、厚真町に来てただく道となるよう地域の魅力を高めて行きたいと思っております。

北海道150年事業 「北の大地を拓いた先駆けの“みち”」

縄文時代からの北海道内陸ルート

厚真町教育委員会 学芸員 乾 哲也

“キラキラ土器の道”



平成30年6月15日（金）

札幌市中央区 かでる2・7



北海道 地図



日本海

オホーツク海

北海道

厚真町

太平洋

札幌市

札幌

千歳

苫小牧市

千歳市

宗谷海峡

礼文島

利尻島

焼尻島

天売島

紋別

網走

斜里

旭川

北見

根室

滝川

富良野

帯広

釧路

奥尻島

大島

津軽海峡

函館

本州

択捉島

国後島

色丹島

歯舞諸島



- 人口約4,652人（平成30年5月末）
その約3割が第一次産業の農業の町 厚真町！
- 日胆地区随一の水田の町
 - 日本一のハスカップ作付面積
 - 北海道最大の火力発電所
 - 日本最大の石油備蓄基地（苫小牧市と共有）
 - 日本最大級フェリーが入港する苫小牧東港



平成 28 年度 厚幌ダム建設事業埋蔵文化財発掘調査業務 調査地点位置図





平成14年から30年まで17年間
続いた発掘調査

厚真川上流域でたくさん見つかるキラキラ土器！



土器作りには、粘土の収縮率を抑えるために砂などの混和材としての砂を混ぜます。その混和材を調べることも考古学の方法の一つです。

混和材からどんなことが判るのか？

ある地域に特徴的な岩石や微化石を見つけることができると、土器の製作地を特定することができます。**土器の移動 = その他の遺物や人の動きが見えてきます！**

キラキラ土器の^{すなつぶ}砂粒を調べる！

～土器の中に富良野のキラキラ石英！～



キラキラ土器を
砕きすりつぶす。
もったいないけど・・・。
新しい発見に期待！



40倍の^{じったいけんびきょう}実体顕微鏡で
観察！ どんな岩石・
鉱物が入っているかの
なあ？



すりつぶした土器の
砂を0.425・1・2・5
mmの4段のフルイ
にかけて砂粒の大き
さを見る。



直径1 mm以上の半透明の石英が
いっぱい！ 写真中央上側の金色
は雲母です。

分析：斜里町教育委員会 合地信生氏

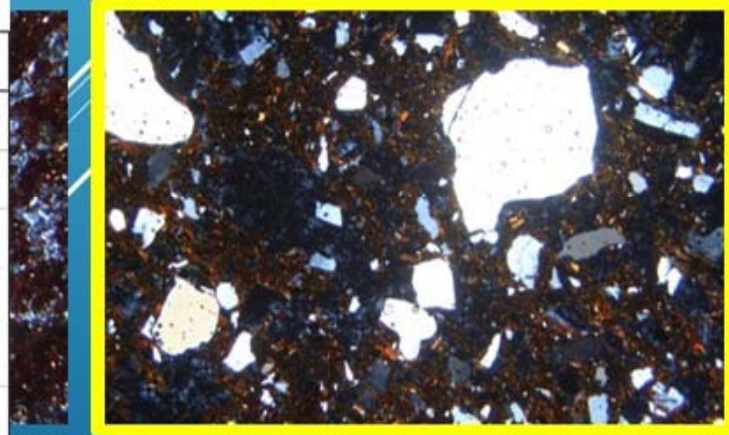
砂粒の正体は？ 顕微鏡で観察！



土器を粉々に砕いてみたら？

厚真産の土器とキラキラ土器の観察から

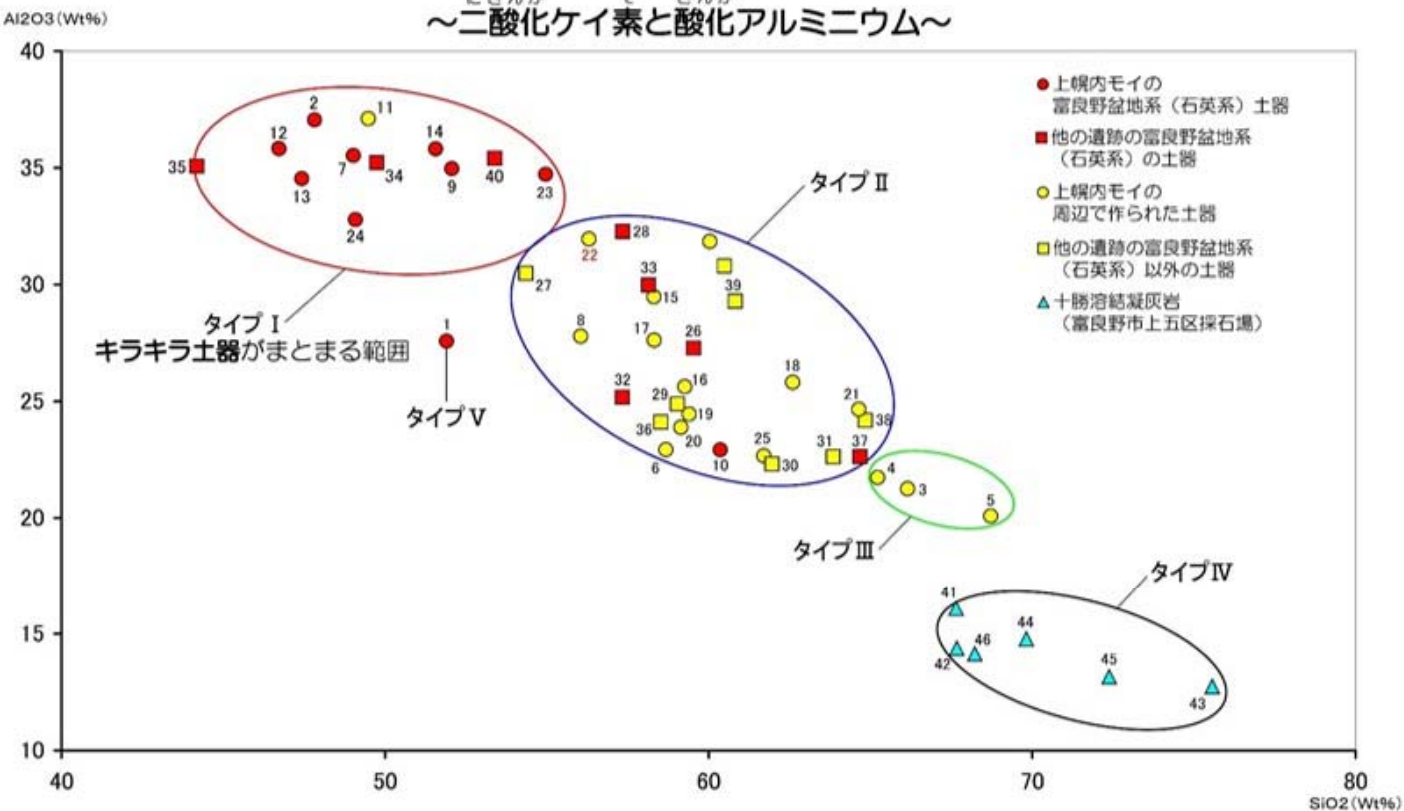
| 着目点 | 厚真産の土器 | キラキラ土器 |
|-------------|----------------|-----------|
| 土器の色 | クリーム色・茶色 | 橙色・黒色 |
| 土器の厚さ | 薄い | 厚い |
| 土器に含まれる小石の色 | 灰色・赤色・黒色 | 白色・金色・透明 |
| 土器に含まれる砂の種類 | 泥岩・チャート・角閃石・長石 | 凝灰岩・石英・雲母 |
| 土器に含まれる砂の形 | 丸い小石 | 角ばった小石 |
| 土器に含まれる砂の量 | 多い | ものすごく多い |
| 土器の縄文 | 細かい | 荒い |



分析、分類してみると！

縄文土器の化学組成グラフ

～二酸化ケイ素と酸化アルミニウム～



46点の縄文土器の粘土を分析しました。いろいろな方法の中で、上のグラフが一番わかりやすい結果が出ました。

土器の粘土の化学組成からみた分類表

キラキラ土器

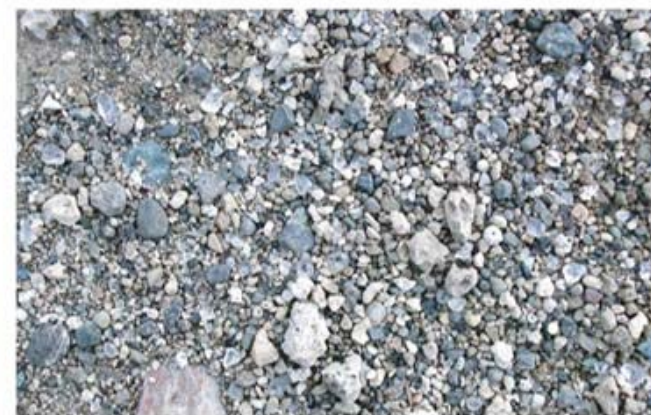
| No | タイプ分類 | 時期 | 土器型式 | 観察 | 遺跡名 |
|---------|-------|---------|------------|------|-------------|
| タイプ I | | | | | |
| 14 | G | 縄文後期初頭 | 余市式 | 石英系 | 厚真町・上幌内モイ遺跡 |
| 40 | H | 縄文後期初頭 | 余市式 | 石英系 | 芦別市・滝里安井遺跡 |
| 34 | G | 縄文後期初頭 | 余市式(伊達山Ⅱ式) | 石英系 | 富良野市・無頭川遺跡 |
| 35 | G | 縄文後期初頭 | 余市式(伊達山Ⅰ式) | 石英系 | 富良野市・無頭川遺跡 |
| 23 | H | 縄文早期終末 | 東館路Ⅳ式 | 石英系 | 厚真町・厚幌1遺跡 |
| 9 | H | 縄文中期終末 | 北筒式 | 石英系 | 厚真町・上幌内モイ遺跡 |
| 12 | G | 縄文後期初頭 | 余市式 | 石英系 | 厚真町・上幌内モイ遺跡 |
| 13 | G | 縄文後期初頭 | 余市式 | 石英系 | 厚真町・上幌内モイ遺跡 |
| 2 | F | 縄文早期後葉 | 中茶路式 | 石英系 | 厚真町・上幌内モイ遺跡 |
| 24 | G | 縄文後期初頭 | 余市式 | 石英系 | 厚真町・厚幌1遺跡 |
| 7 | H | 縄文中期後葉 | 柏木川式 | 石英系 | 厚真町・上幌内モイ遺跡 |
| 11 | D | 縄文中期終末 | 北筒式 | 非石英系 | 厚真町・上幌内モイ遺跡 |
| タイプ II | | | | | |
| 28 | I | 縄文晩期後葉 | 大洞A式並行期 | 石英系 | 平取町・額平川2遺跡 |
| 15 | A | 縄文後期初頭 | 余市式 | 非石英系 | 厚真町・上幌内モイ遺跡 |
| 25 | A | 縄文後期初頭 | 余市式 | 非石英系 | 厚真町・厚幌1遺跡 |
| 26 | H | 縄文中期後葉 | 柏木川式 | 石英系 | 苫小牧市・美栄東6遺跡 |
| 33 | F | 縄文中期中葉 | 押型文平庭内筒土器 | 石英系 | 富良野市・鳥沼遺跡 |
| 37 | F | 縄文晩期前葉 | 上ノ国式並行期 | 石英系 | 富良野市・無頭川遺跡 |
| 38 | C | 縄文晩期前葉 | 上ノ国式並行期 | 石英系 | 富良野市・無頭川遺跡 |
| 39 | H | 縄文晩期前葉 | 上ノ国式並行期 | 非石英系 | 富良野市・無頭川遺跡 |
| 6 | F | 縄文中期後葉 | 天神山式 | 非石英系 | 厚真町・上幌内モイ遺跡 |
| 8 | I | 縄文中期後葉 | 柏木川式 | 非石英系 | 厚真町・上幌内モイ遺跡 |
| 29 | H | 縄文晩期後葉 | 大洞A式並行期 | 石英系 | 平取町・額平川2遺跡 |
| 36 | B | 縄文後期初頭 | 余市式(伊達山Ⅰ式) | 非石英系 | 富良野市・無頭川遺跡 |
| 21 | A | 縄文後期前葉 | タブコブ式(新) | 非石英系 | 厚真町・上幌内モイ遺跡 |
| 30 | H | 縄文晩期後葉 | 大洞A式並行期 | 非石英系 | 平取町・額平川2遺跡 |
| 31 | H | 縄文晩期後葉 | 大洞A式並行期 | 非石英系 | 平取町・額平川2遺跡 |
| 10 | H | 縄文中期終末 | 北筒式 | 石英系 | 厚真町・上幌内モイ遺跡 |
| 19 | I | 縄文後期初頭 | 余市式 | 非石英系 | 厚真町・上幌内モイ遺跡 |
| 22 | G | 縄文後期初頭 | 沈線文系土器 | 非石英系 | 厚真町・上幌内モイ遺跡 |
| 32 | F | 縄文早期中葉 | アルトリ式 | 石英系 | 富良野市・鳥沼遺跡 |
| 16 | B | 縄文後期初頭 | 余市式(小野幌式) | 非石英系 | 厚真町・上幌内モイ遺跡 |
| 17 | B | 縄文後期初頭 | 余市式(小野幌式) | 非石英系 | 厚真町・上幌内モイ遺跡 |
| 18 | E | 縄文後期初頭 | 余市式 | 非石英系 | 厚真町・上幌内モイ遺跡 |
| 27 | H | 縄文晩期後葉 | 大洞A式並行期 | 石英系 | 平取町・額平川2遺跡 |
| 20 | H | 縄文後期初頭 | 余市式 | 非石英系 | 厚真町・上幌内モイ遺跡 |
| タイプ III | | | | | |
| 3 | B | 縄文早期後葉 | 中茶路式 | 非石英系 | 厚真町・上幌内モイ遺跡 |
| 4 | F | 縄文早期後葉 | 中茶路式 | 非石英系 | 厚真町・上幌内モイ遺跡 |
| 5 | C | 縄文早期終末 | 東館路Ⅳ式 | 非石英系 | 厚真町・上幌内モイ遺跡 |
| タイプ V | | | | | |
| 1 | G | 縄文早期後葉 | 中茶路式 | 石英系 | 厚真町・上幌内モイ遺跡 |
| タイプ IV | | | | | |
| 41 | H | 十勝溶結凝灰岩 | | | 富良野市・上五区採石場 |
| 42 | F | 十勝溶結凝灰岩 | | | 富良野市・上五区採石場 |
| 43 | H | 十勝溶結凝灰岩 | 軽石 | | 富良野市・上五区採石場 |
| 44 | D | 十勝溶結凝灰岩 | | | 富良野市・上五区採石場 |
| 45 | D | 十勝溶結凝灰岩 | | | 富良野市・上五区採石場 |
| 46 | C | 十勝溶結凝灰岩 | | | 富良野市・上五区採石場 |

キラキラ土器の素！^{もと}

とかちようけつぎょうかいがん
十勝溶結凝灰岩



かみごく とかちようけつぎょうかいがん がけ
富良野市上五区の十勝溶結凝灰岩の大きな崖。30m以上の高さです！



十勝溶結凝灰岩の砂。石英の粒がわかるかな？



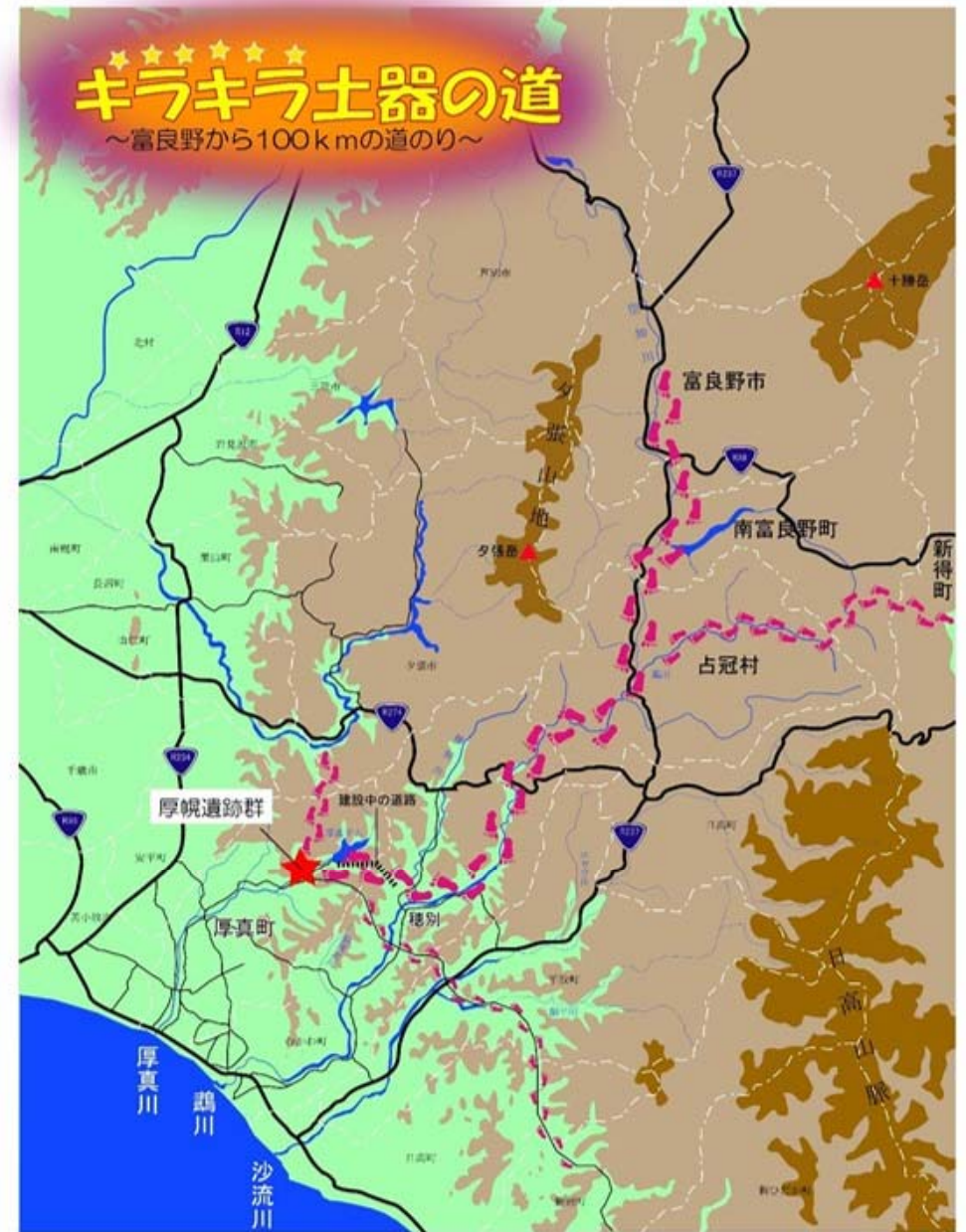
富良野の畑は白い！畑の土には石英の粒がたくさん！

富良野地域で作られた 縄文土器が運ばれていた！

厚真川流域からひと山越えると北海道の
長流“鶴川”！

その源流は北海道の中央部、占冠村トマム
岳のふもと。流路延長135km、北海道で
5番目の河川。

厚真川上流域は、山奥の行
き止まりではなかった！



縄文人の交流はキラキラ土器だけではない！

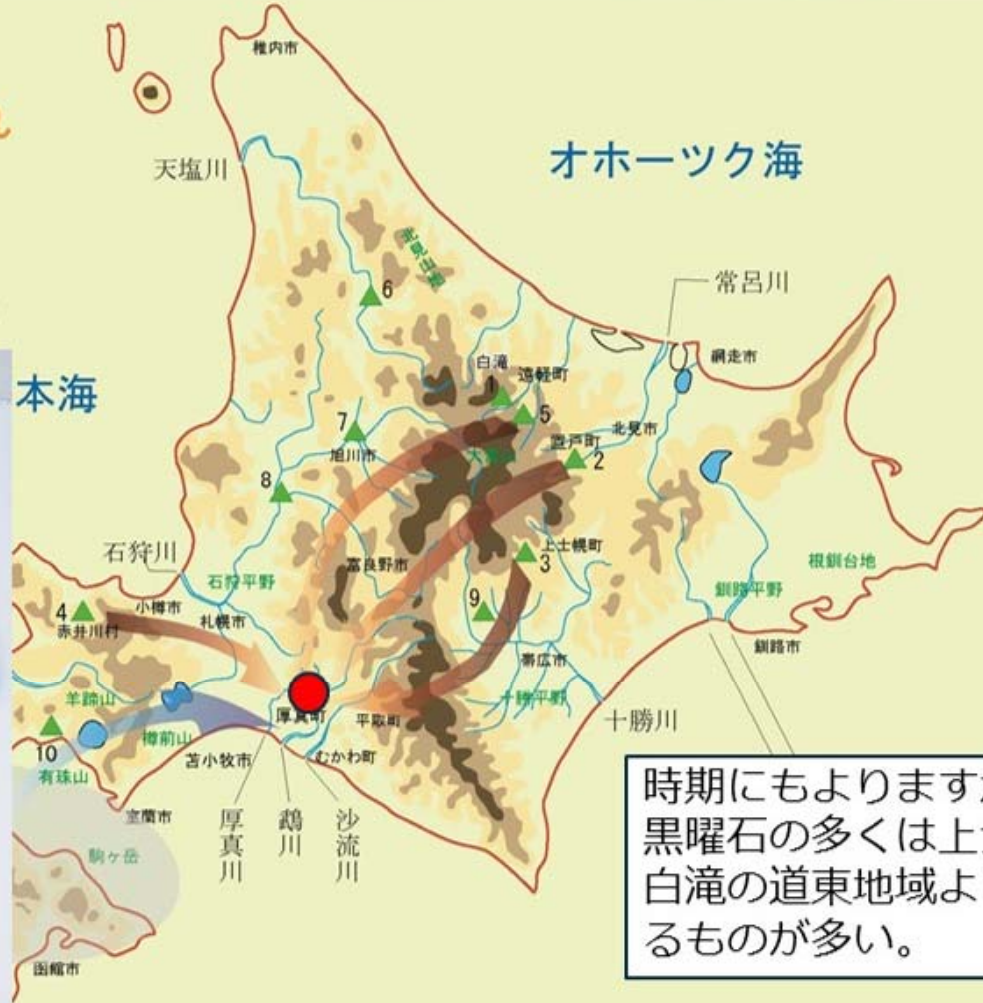
生活必需品 黒曜石

黒曜石原石や流通母材の
両面調整石器が多数出土！

黒曜石の流れ



頁岩の流れ



時期にもよりますが、厚真町の黒曜石の多くは上士幌、置戸、白滝の道東地域より運ばれているものが多い。

4100年前の特殊な丸のみ形石斧

石狩川中流域・空知川流域が中心地の石斧

厚真町内では4ヶ所から発見！

苫小牧市で2ヶ所、穂別でも1点が出土しています。



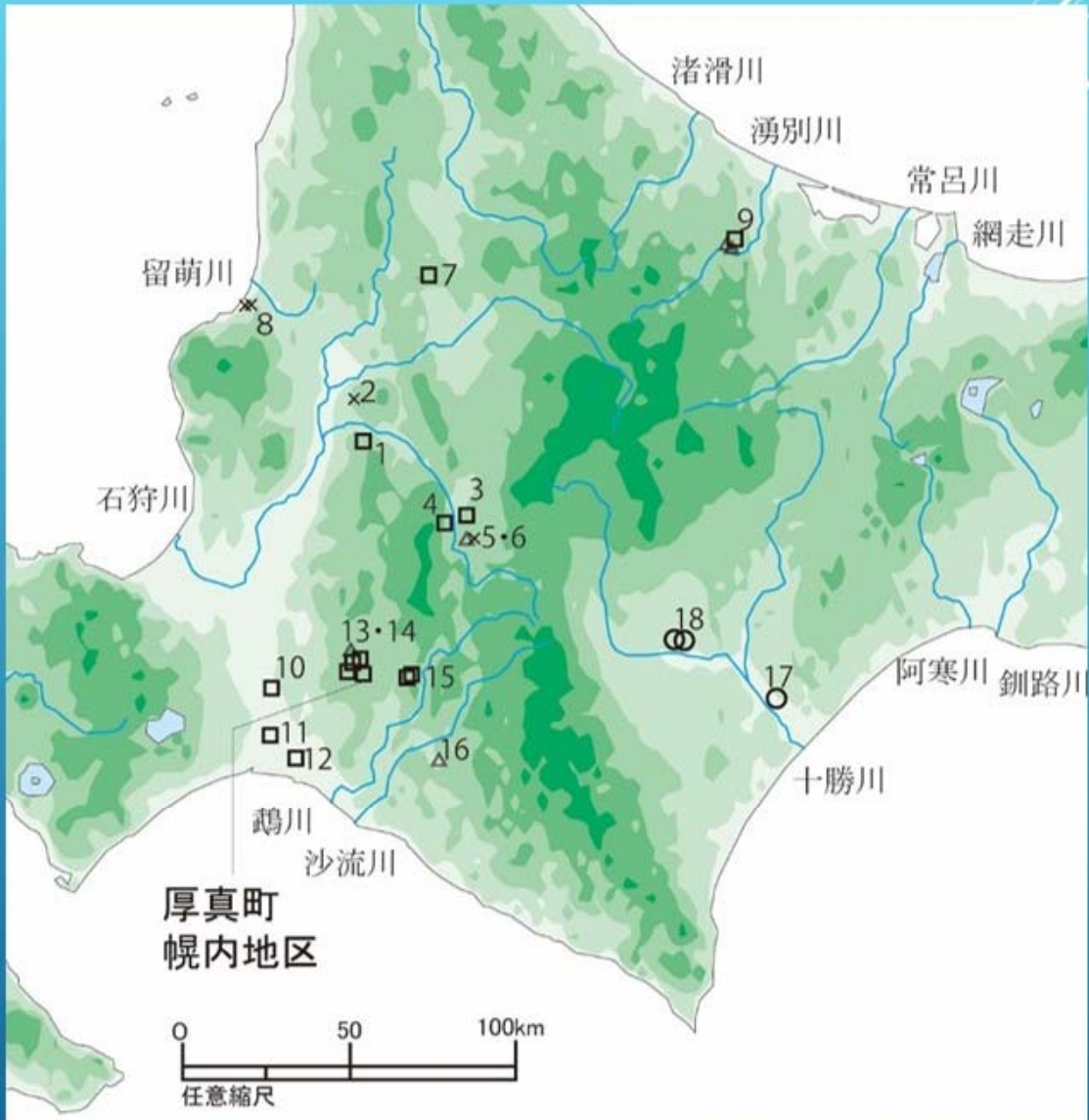
4000年前の特殊な石器

棍棒形石器

道内18カ所、26点が見つかっています。



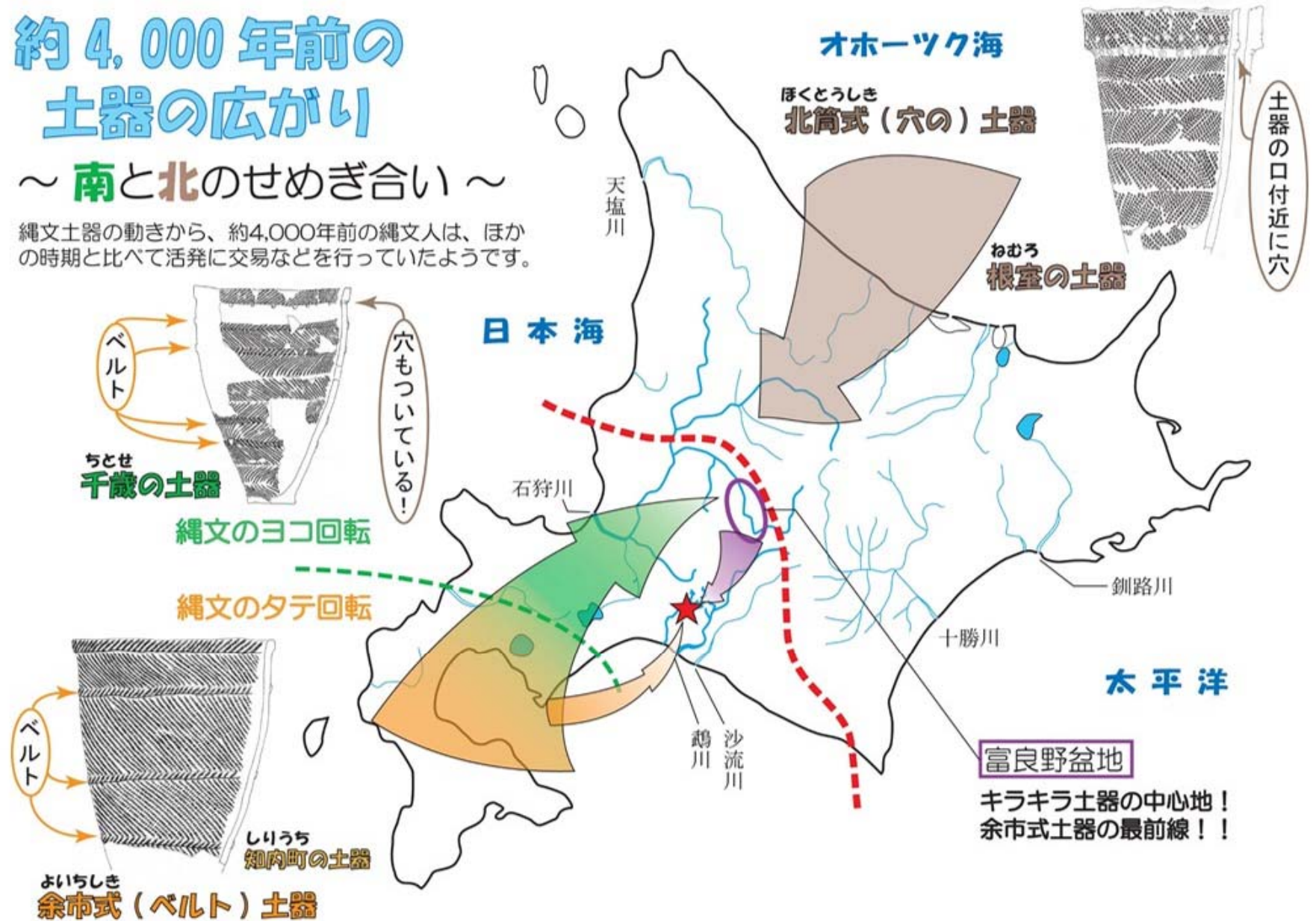
厚真町ショロマ1 遺跡の棍棒形石器



約 4,000 年前の 土器の広がり

～ 南と北のせめぎ合い～

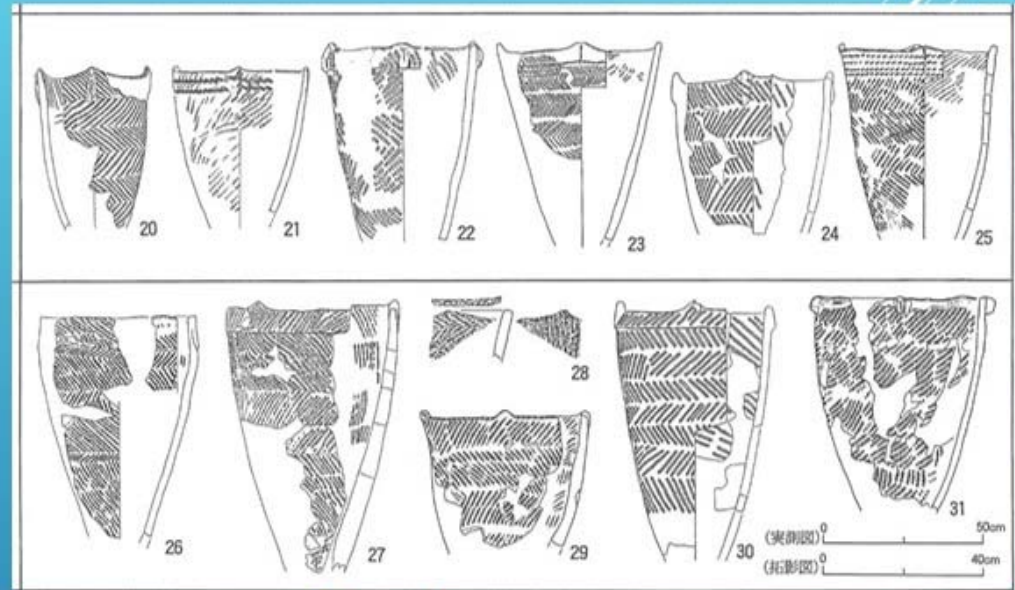
縄文土器の動きから、約4,000年前の縄文人は、ほかの時期と比べて活発に交易などを行っていたようです。



一方通行ではない縄文の道

約3,800年前の縄文人が移動した証！

富良野市無頭川遺跡出土のタプコプ式土器



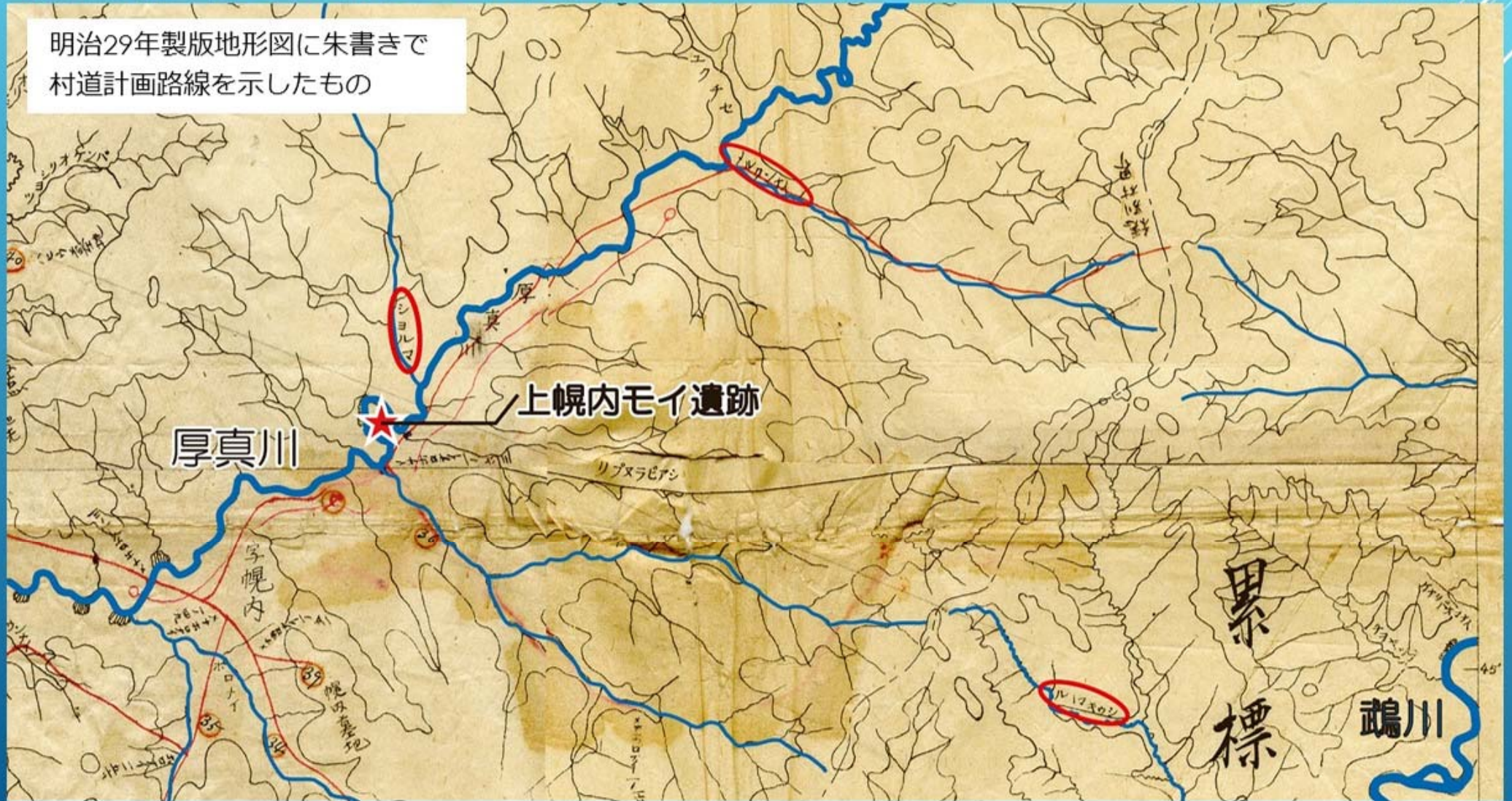
タプコプ式土器は、石狩南部から胆振東部・日高にかけて作られた縄文土器

富良野市出土のタプコプ式土器は、石英結晶を含むことから、製作者はその技法を携え、移動してきた富良野地域の粘土を使ってこの土器を作っています。

村道計画図にも記された縄文からの山越えルート

厚真町役場 大正年間

明治29年製版地形図に朱書きで
村道計画路線を示したもの

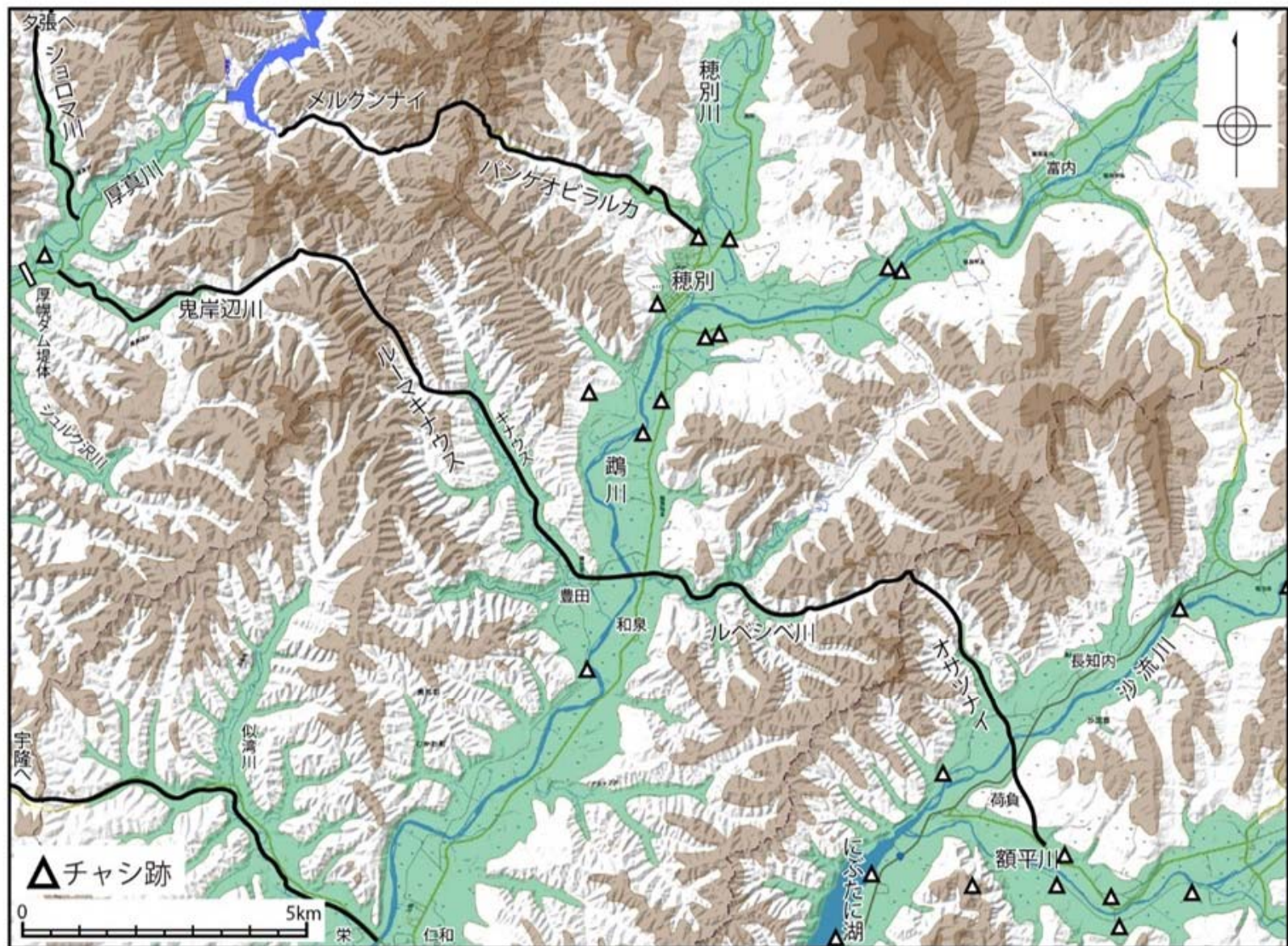


ひと山越えると 鶴川！ ふた山越えると 沙流川！

特徴的なアイヌ語地名

- ・メルクンナイ
- ・オビラルカ
- ・(シヨルマ)
- ・ルーマキウシ
- ・ルベシベ

アイヌ語での「ル」
日本語では「道」



△ チャシ跡

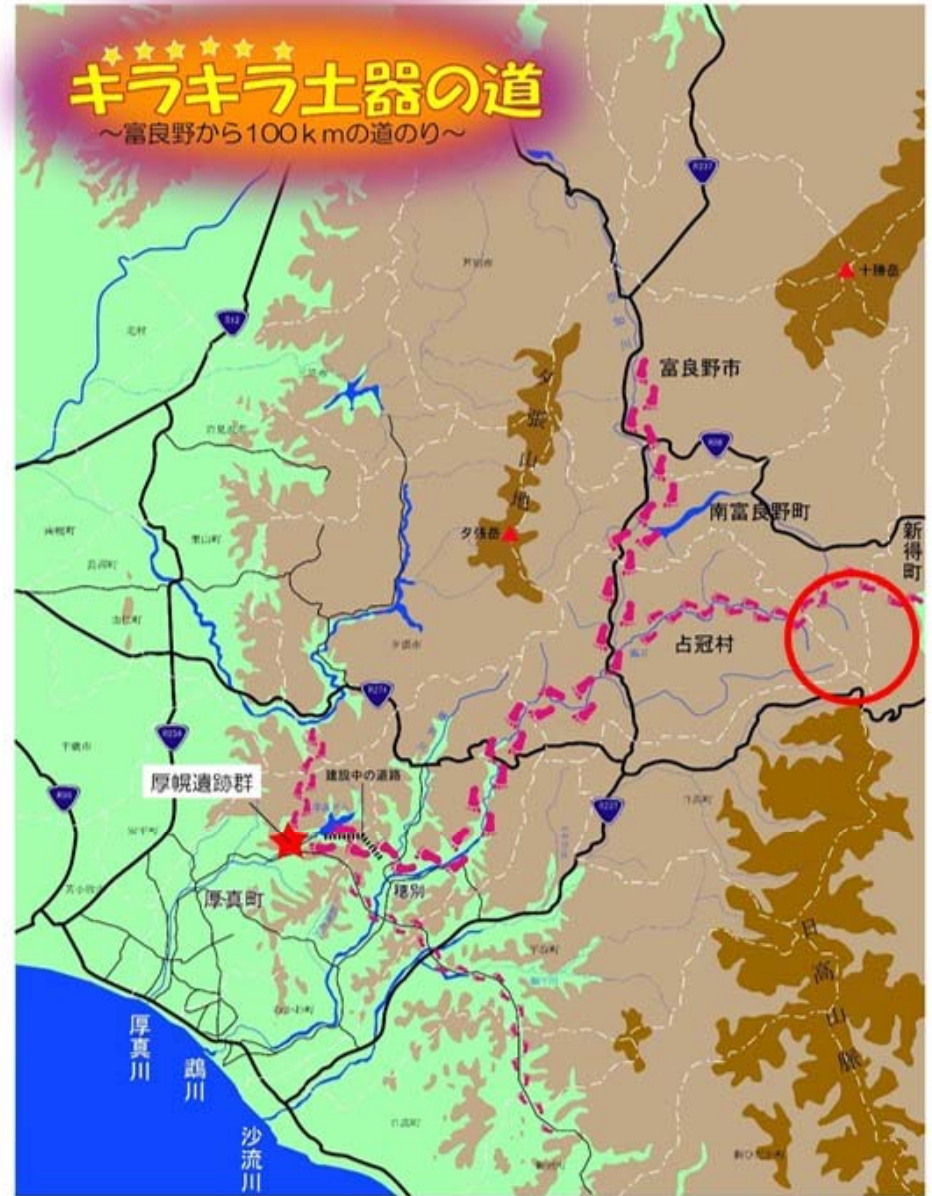
0 5km

標高 0 ~ 100m 標高 100 ~ 200m 標高 200 ~ 300m 標高 300 ~ 400m

鵡川の源流

北海道の中央部、占冠村トマム岳（標高1238m）
流路延長135km、北海道で5番目の河川。

北海道島の中央部から太平洋へ注ぎ、河川勾配が緩く、沙流川と比べて「女の川」とも言われます。 ※沙流川：104km・935m

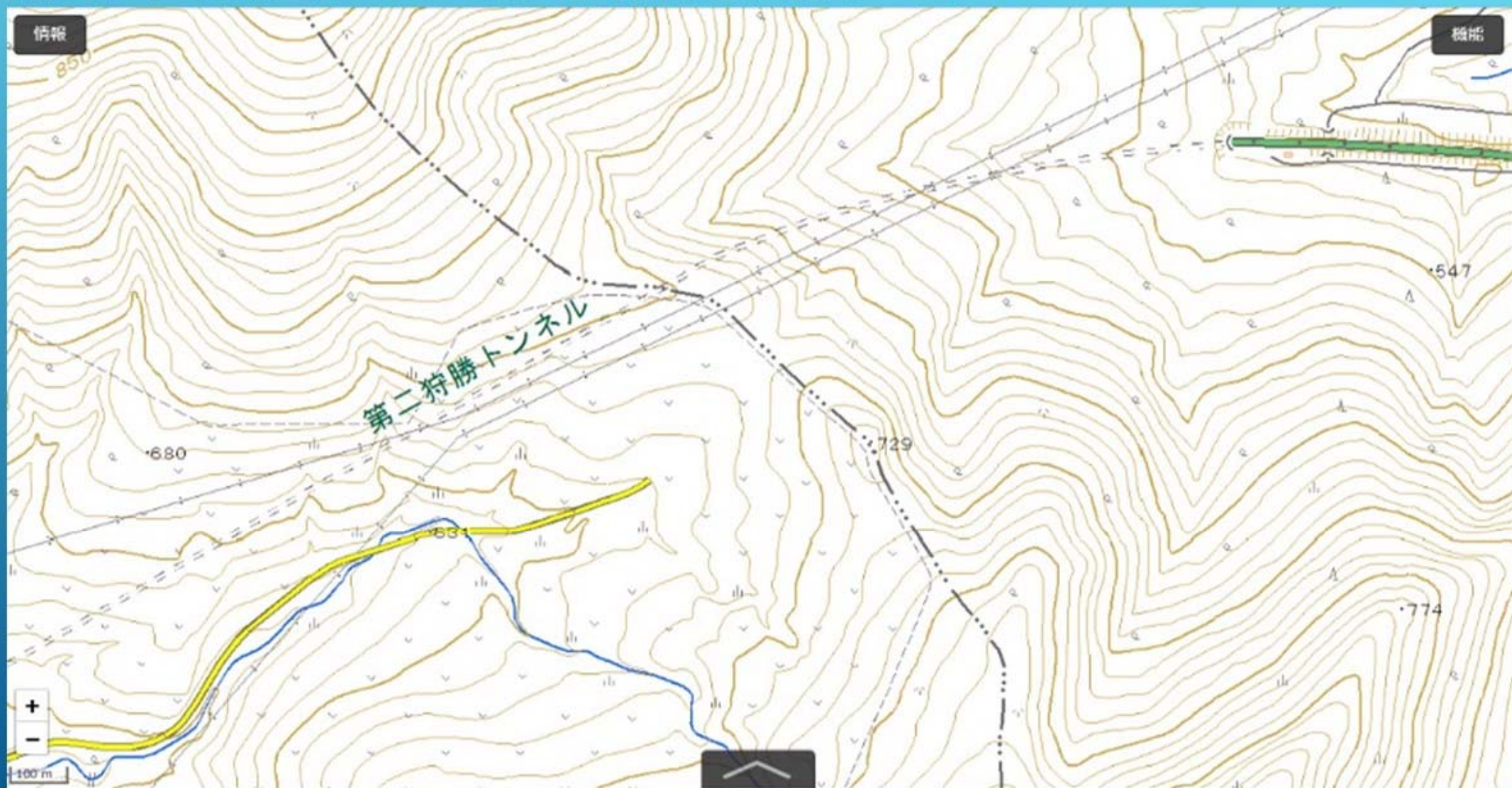


鵜川の源流域の地形的特徴

ルオマンソラプチ川と新得町
道が・奥に入る・空知川



私たちも通っていた十勝越えルート



十勝越えの場所 標高786m。

南富良野町と新得町の境界です。

日高山脈—十勝岳連峰・大雪山系を結ぶラインで狩勝峠に次いで低い場所！



北海道の開拓時代の重要ルート！



山稜の鞍部。地図が無い時代において、誰が見てもその向こうへ越えるべきポイント！



新得駅通所跡の由来



駅通所は、明治三十三年、駅通所規定が制定され、開拓移民や般施行者の交通に不便のないよう要所に設置されるようになった。開拓の先人達は十勝川を遊行するかあるいは徒歩により荷を背負い子供の手を引き道なき道を妻を励ましながら困難を極めて目的地に到達したのである。

新得駅通所は、明治三十年十月帯広から旭川に通ずる石狩道路の開通に伴って、明治三十二年八月、当初パンケンシントク人馬車継立所として国費をもって設置され、その後新得駅通所と改称、官馬七頭馬車六台・建物はおよそ百年方トメで土・畳室巨那用八畳と6畳般用の三室を備え、鎌谷与七が取扱人となる。

水利と見晴らしのよい、中新得川の上流、石狩道路添いのくの場所が選ばれた。

当時の駅行路は、帯広―清水―新得―石狩車内であり、人馬の往来は日平均七〜八名、多い時には二十余名にのぼったといふ。

―時は流れて―
明治四十年九月八日、旧狩勝線の開通によりその任務を終え、翌年二月、八年余の駅通所経営は廃止された。

駅通所間距離

新得―清水 八、八四K(二里九町)

新得―帯広 三九、六K(〇里三町)

新得―車内 九、九六K(二里九町〇間)

新得町建立

平成五年九月 (資料調査 新得郷土研究会)

この駅通、ルートも狩勝ルートが開通することにより廃止となる。

時代とともに変わるルート 厚真川上流域の集落の消滅



近世アイヌ文化期にはいると、コタン跡、生活道具は出土しない。そして山での狩猟での大木係わる“送り場跡”のみが見つかる。



平成30年開通予定！ 現代に蘇えるキラキラ土器の道！



道道北進平取線＝厚真町とむかわ町穂別を結ぶ
車社会の新規ルートととして開通。

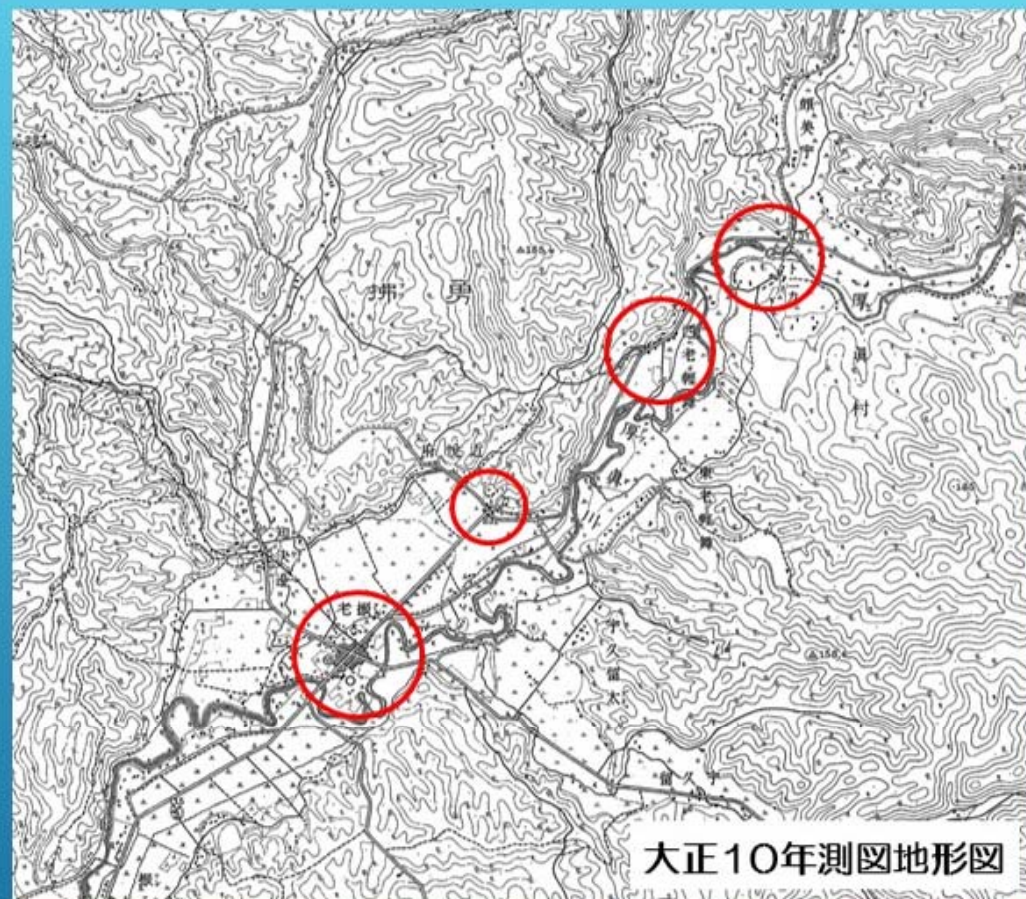
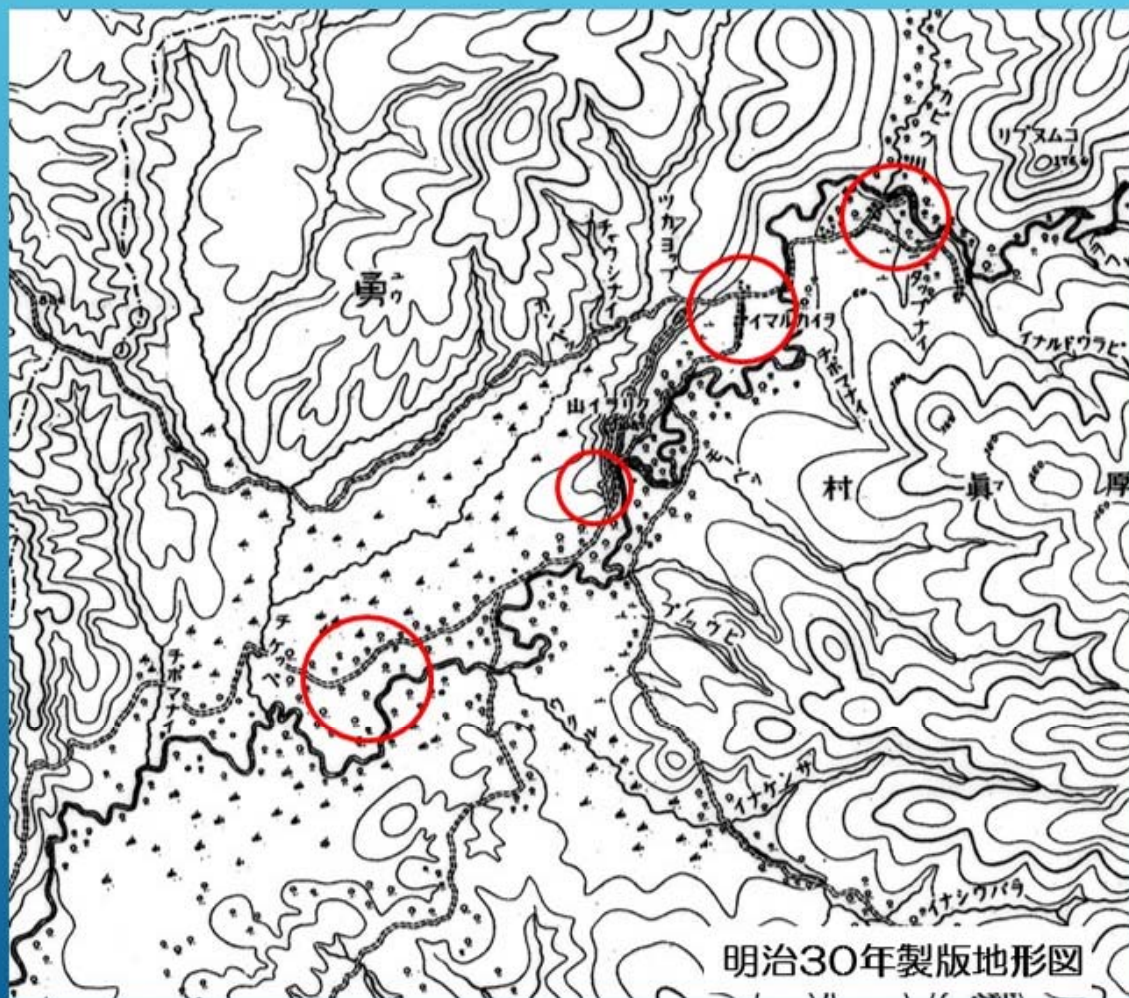


林道入り口



オビラルカトンネル（厚真側）

明治・大正にもあった道と集落の変遷



わずか約30年で十字路的交差路が造られたことで、厚真の市街地が変遷していった活気ある激動の時代

厚真の縄文遺跡、キラキラ土器の道

縄文土器の研究は、その形や様々な文様からの変遷、地域間のつながりを注目してきました。そして、これまでは海の道、海岸づたいの移動が言われていました。

しかし厚真の山奥での発掘調査によって広い北海道を内陸の最短ルートで、かつ徒歩の移動で勾配の緩い川、山々の低みの楽な所を選んでいたことが判りました。

そして、その道はアイヌの人びとにも受け継がれ、松浦武四郎が記録した地名として、現代の私たちが知らず知らずのうちに引き継いでいることが判りました。

きっと、これからも縄文人や先住民族アイヌの方々からの知恵に私たちは驚かされることと思います！